

日本人学習者が誤り易いフランス語の問題点

—— jusqu' (à) / avant と動詞との共起 ——

澤

護

日本人学習者がフランス語を書き、訳すときにきまって間違える言葉、用法がある。これは、フランス語にはフランス語の構造があり、日本語には日本語独自の構造があるのだから当然といえば当然で、その細かな点をいちいち調べて両者を比較してみても無意味なことも多い。しかし、本大学において初めてフランス語を学ぶ学生のおかす誤りの例を集めてみると、毎年きまった誤りが現われる結果が生じている。これらの問題点の中から、日本語からフランス語、フランス語から日本語へ訳す場合、両方にまたがる誤りの多い例をひとつ示してみたい。

日本人学習者のおかし易い用法のひとつに、jusqu' (à) (マデ) と avant (マデニ) がある。ここで扱うマデとマデニは、あくまでフランス語からの発想であることを断っておきたい。日本語のマデは、かなり幅の広い面を持っている助詞である。

1. 時間、距離、状態、限界を表す。

① 7時マデ待ツテルヨ。

② 町マデ歩イテイコウ。

2. 程度を表す。「ほど」「ばかり」の意。

① 驚クマデモナイサ。

② 身ニアマルマデノ御志。(源桐壺)

3. 「……さえ」「……でも」の意。

①下着マデズブヌレダ。

この他、日本語のマデには「だけ」とか「までも」の意味もあり、さらに終助詞として文章の終止した形に接続して感動を表す場合もある。「君が言ウマデモナイヨ」となれば、「君が言うにはおよばない」と軽侮、怒りを含んだ意味にもなる。

ここで扱うマデとマデニは、あくまでフランス語を基点としたもので、フランス語の *jusqu' (à)* と *avant* に限ってのことであり、日本語でいえば、1の時間を表わすものが中心となる。この時にかかわるマデとマデニであっても、大勢の学生に質問したところ、意外なことにマデとマデニの限界は決して一様でなく、非常に混乱しがちな語であり、しかも地域差や生活環境によって多少なりとも差違がみられるということであった。したがって、この結果が初心者の書くフランス語の用法にも表われてくることになるのかも知れない。この点については、これから先の記述の中で考察してみることにする。

具体例として、次の日本文を初心者（フランス語専攻の2，3年生にあってもしばしばみられる）にフランス語に訳させると、下記に示すふた通りの解答例がよせられる。

4. 9時マデニコノ仕事ヲ終エナケレバナラナイ。

① Il faut terminer ce travail jusqu'à 9 heures.

② Il faut terminer ce travail avant 9 heures.

この例文4の正解は②であって、①は誤訳である。（以下×印を付けて誤りの例であることを示す。）このような誤りをおかす理由には、*jusqu' (à)* と *avant* を混同してしまう場合と、日本語のもつマデとマデニのあいまいさとにある。つまり、例4の日本文を話し言葉で、「9時までこの仕事を終えなさい」と言うことがあるからである。次の例文をみて戴こう。

5. ①コノ仕事ヲ5時マデ続ケナサイ。

② コノ仕事ヲ 5 時マデニ続ケナサイ。(×)

6. ① コノ仕事ヲ 5 時マデ終エナサイ。(×)

② コノ仕事ヲ 5 時マデニ終エナサイ。

例文 5, 6 において, 5-②と 6-①は非文法的である。なぜ, 「……マデニ続ケル」とか「……マデ終エル」とは言えないのであろうか。どうやら, 動詞と関連がありそうだとすることが漠然とではあるが推定されよう。

ところで, 例文 4 の日本文に対してフランス語訳がふた通りでてくるのはなぜなのだろう。まず, この文を訳す場合に手懸かりになるのは和仏辞典であろう。そこで, 日本で出版されている和仏辞典の内から 2 冊を選んで「マデ」の項を引いてみた。

『スタンダード和仏辞典』(大修館 1970年)

一まで jusqu'à, jusqu'à ce que + sub.,

一までに avant, avant de + inf, avant que [ne] + sub.

『新和仏小辞典』(白水社 1973年)

一まで jusque; jusqu'à ce que sub.

一までに avant; avant de inf; avant que sub.

以上のようになっており, その後に若干の例が記載されている。この 2 冊の辞典のマデとマデニの解釈は jusqu'à と jusque の違いはあるにしても, 他の面では全く共通しており, 提示の仕方としてはほぼ妥当だと言わなければならない。しかし, 初歩の学習者がこれらの辞典を利用して, 次のような日本文をフランス語に直す場合には問題があるような気がする。

7. 明日マデニ 1 万円用立テナケレバナラナイ。

① Il me faut dix mille yen jusqu'à demain. (×)

② Il me faut dix mille yen avant demain.

③ Il me faut dix mille yen pour demain.

「マデニ」は *avant* であるから、少なくとも *jusqu'à* は使えそうにないと考えて、7-②の解答をよせることになるであろう。この②の解答はフランス語としては正しいが、日本文の意味とは違ったニュアンスを含んでいると言わなければならない。つまり、②の解答例は「明日マデニ」ではなく、「今日ノウチニ1万円用立テナケレバナラナイ」の意味になり、例7の日本文の正解にはならない。したがって、「マデニ」= *avant* としか考えられないと誤った解答をよせることになるし、この点は和仏辞典を引いて書いてただけでは全く解決できない。まして、例7-③のようなフランス文は書けそうにない。『スタンダード和仏辞典』の例文には、「10時までには終わります。J'aurai fini le travail avant dix heures.」が、『新和仏小辞典』では「6時までにはすませます。J'aurai fini ce travail avant six heures.」のほぼ同一の例文が載っている。この日本語の文章とフランス語の文章が同じ意味であるかどうか考慮すべき問題がないでもない。この面に関しても、先のところで検討することになるであろう。今度は仏和辞典で *jusque* と *avant* の項を引いてみよう。

『スタンダード仏和辞典』（大修館 1975年）

jusque ……まで., ほどに, まで., できえ, までも.

avant の前に., の（より）前に., より前（先・上）に.

『新仏和中辞典』（白水社 昭和46年）

jusque まで, に到るまで, までも, できえ, ほどに.

avant の前に, 以前に, までに; の前に, より前に, の手前に.

以上のような見出し語が示されている。『スタンダード辞典』では *avant* の個所の見出し語の日本語には「マデニ」は書かれてなく、例文中で「マデニ」と訳されているのが1例ある。つまり、「Il sera ici avant une heure. 1) 1時まで。2) 1時間以内に彼はここに来るだろう」がそれである。このフランス語の例文は確かに二つの日本語訳が考えられ、この

提示の仕方は正しい。avant deux heures とすれば、1) 2 時前に、2) 2 時間以内に、とふた通りに訳せるわけだが、この混乱を避けるために後者に d'ici を加えて、d'ici à deux heures (2 時間以内に) とすることも多い。一方、『新仏和中辞典』の avant の見出し語に「までに」と訳出されているが、時を表わす例として「Venez avant midi. 昼前にいらっしゃい。」があるだけである。このフランス文の日本語訳は「昼までにいらっしゃい」と訳していない点を注意して欲しい。結論的に言えば、これらの和仏、仏和辞典を用いて、初歩者が適切に「マデ」と「マデニ」を日本語に訳したり、フランス語にしたりするのは困難を共うと言えるであろう。特に、最も間違いをおかし易い時間、日、曜日に関する例文は是非とも加えておかなければならない。

先ず、具体例を日本語のマデとマデニの用法から検討してみることにするが、これらの例は大勢の学生と議論したものである。

8. 1 時マデニ来ナサイ。

この例の場合、「1 時過ぎたら困るが、1 時前ならよい」という意味に解釈する者が最も多かった。それでは、「1 時きっちり」の場合はどうかとの質問には、それでもよいという者と「12 時 59 分 59 秒まで」だとする者との別れた。つまり、例 8 の日本文は、「1 時ニ来ナサイ」「1 時前ニ来ナサイ」「1 時頃ニ来ナサイ」ともとれるあいまいな文章だとの結論になった。点としての時間という単位に問題があるのかと考えて、次に同じような質問を試してみた。

9. 土曜日マデニ来ナサイ。

この文については、話した時の曜日が問題になるという者もいたが、「金曜日でもよいし、土曜日でも構わない」と考える者が全員であった。例文 9 から例文 8 を眺めてみると、少なくとも例文 8 は「1 時でもよい」というようにとれそうな気がする。

10. 5 日マデニ来ナサイ。

この日に関する概念は曜日の場合と全く同様に、「5日に訪ねてもよい」という結論であった。そこで、月の例を示してみた。

11. 12月マデニ来ナサイ。

この問はかなりの議論を呼んだ。つまり、11月中だとする意見と、12月も含まれるという意見とであった。ある者は11月30日までだとし、またある者は12月31日までだと主張した。少なくとも、例8の場合にもめた「12月頃に来なさい」の意味はないという。もっとも、例11のようなあいまいな言い方は日本語ではしなく、「11月末までに」とか「12月中旬に」といった明瞭な言い方をするのが普通だとする意見が大勢をしめた。ところが、年を示す場合になるとさらに混乱するのではないかと考えられたが、意外な結果に終わった。

12. 1976年マデニ来ナサイ。

例12のような言い方は存在しそうにないし、話し言葉で使うことがないと、実にあっさりした返事が戻ってきた。しかし、異国から日本に帰る際に、「1976年までにまたいらしてくださいよ」と言えそうな気にもなるのではあるが……

大勢の学生の意見をまとめると、日本語の時を示す「マデニ」は、あまりにも短かい点として考える時間、また反対にあまり長い線として考える時間を表わす場合にはかなりあいまいな性格を持つ語ということになりそうである。このようなあいまいな性格を持つ「マデニ」をフランス語訳するのであるから、当然の誤訳や考え方の食い違いもでてくるのだと言わなければならない。それではなにか規則性がないかもう少し日本文で眺めてみよう。

13. ①コノ講議ハ3時マデ終ワル。(×)

②コノ講議ハ3時マデニ終ワル。

14. ①私タチハ3時マデ到着スル。(×)

②私タチハ3時マデニ到着スル。

上記の例文ではどちらも①の文は非文法的であり、②の文は文法的である。これは動詞との共起に制限があり、マデニと共起できる動詞はその素性として非継続的なものであるのに対して、マデと共起できる動詞はその素性として継続的なものではないかと考えられてくる。こういった考え方は、フランス語の分野ではかなり古くから取りあげられていたことであるが、次に示す日本語の例をみると、フランス語の場合とほぼ同じようなことが言えそうである。

15. ①母ハ80オマデ生キルダロウ。

②母ハ80オマデニ生キルダロウ。(×)

16. ①母ハ80オマデ死ヌダロウ。(×)

②母ハ80オマデニ死ヌダロウ。

例15-②および例16-①のような言い方は日本語ではしない。なぜ、「マデニ生キル」とか「マデ死ヌ」という言い方をしないのであろうか。これまでの記述から、少なくともある動詞にはマデが使えるが、ある動詞にはマデが使えないということが理解できるであろう。例文15の「生キル」という動詞は、その素性として継続を表わすものであり、例文16の「死ヌ」は瞬間的に行為が終わるものであるから、非継続を表わす動詞ということになる。したがって、「生キル」という継続的動詞はマデと共起するが、マデニとは共起できず、反対に「死ヌ」という非継続的動詞はマデニとしか共起できないということになる。例4の「終エル」という動詞は非継続を表わすものであるから、マデとは共起できないはずである。次の例でもう一度考えてみる。

17. ①コノ仕事ヲ明日マデ終エヨウ。(×)

②コノ仕事ヲ明日マデニ終エヨウ。

果して、「マデ」と「終エル」は共起できない。フランス語であっても、*terminer* という動詞は *avant* としか共起できず、*terminer + jusqu' (à)* という言い方はしないのである。したがって、例4-②の解答が正しいと

いうことになる。

18. ①彼ハ80オマデ働ライタ。

②彼ハ80オマデニ働ライタ。(×)

動詞「働ク」は継続的なものであるから、マデとしか共起できないことが既に理解されたはずである。それでは、継続を表わす動詞の場合、必ずマデであってマデニは使えないのか、非継続的な動詞にあってはマデは絶対に使えないのかとなると、問題がないわけではない。

19. ①7時マデ来ナサイ。(?)

②7時マデニ来ナサイ。

例19-①は非文法的であるように考えられるが、はたしてそうなのであろうか。次の例文を見て戴きたい。

20. ①9月15日マデ来ナサイ。

②9月15日マデニ来ナサイ。

例20-①、②とも文法的に正しく、話し言葉でもよく使われる。もちろん、言うまでもないことだが、①と②とでは異なった意味になり、①の例では話し手が仮に9月1日に語ったとすれば、その日以降9月15日まで「毎日連続して」来なさいとなる。②の例の場合であれば、9月15日までの間に「1度」来なさいという意味になる。例19-①は、この文からでだけ判断すると言えないようだが、「毎日連続して」という意味が言外に含まれていると仮定すれば可能であろう。例19の文は説明上取り上げただけで、この文だけあれこれ詮索するのは意味がないかも知れない。実際、例8の「1時マデニ来ナサイ」の場合、1時が含まれるのか含まれないのか議論してもどうにもならないと言えよう。このような言葉を口にすることは多いが、話し手も聞き手も決して「12時59分まで」とか「1時きっちり」だというようなこと考慮に入れて話しをするわけではないからである。フランス語でも *Viens avant 1 heure.* と言えば「1時ニ来ナサイ」でも「1時前ニ」でも「1時マデニ」でもこれだけの文であればいっこう

に構わないのである。ただ、学校文法で教えた場合には、厳密に「1時前ニ来ナサイ」と教授するだけのことである。例20の日にちを曜日や月に置き換えてもふた通りの言い方は可能だが、年に関しては疑問が生じてくる。

21. ①1976年マデ来ナサイ。(?)

②1976年マデニ来ナサイ。(?)

既に検討したように、マデとマデニは瞬間的な時間や長い期間を表わすには都合のよい語ではないのである。また、上記のような例は動詞「来ル」にも関係があり、日本語の「来ル」は継続、非継続の両方を含め兼ねそなえたものであるからでもある。同じようなことは「行ク」にも言えるし、「眠ル」にも言える。日本語の「寝ル」は実にさまざまな状況が考えられ、「眠ル」「横タワル」「横ニナル」「寝床ニ入ル」「寝床ニ就ク」「寝入ル」「寝ツク」などは全て「寝ル」で片付けてしまう傾向にある。このためか次の例は①、②とも可能である。

22. ①8時マデ眠ル。

②8時マデニ眠ル。

例22-①は「8時まで眠っている」と考えられ、継続を表わしているのに対して、例22-②は「8時前には眠ってしまう」の意で、非継続的である。この例を眺めただけで、「眠ル」という動詞は継続的な要素と、非継続的な要素とを持った中間的な動詞ということになる。

23. ①明日ノ朝ハ8時マデ眠ッテイルヨ。

②昨日ハ8時マデニ眠ッタヨ。

例23-①は継続的、例23-②は非継続的なことは明瞭である。このように動詞によっては、継続・非継続の両面を持つものがある。「眠ル」に関して言えば、この動詞は中性的な性格を有し、「マデ」+「眠ル」にあっては「マデ」によって継続的となり、一方、「マデニ」+「眠ル」の場合は「マデニ」によって非継続的になるのであると考えられよう。別の言い

方をすれば、マデは継続的な動詞と結び付き、マデニは非継続的な動詞と結び付くということである。もし、その動詞が「行ク」「来ル」などのように中性的なものであれば、マデとマデニによってそれぞれ継続・非継続が現わされることになる。ただし、問題がないわけではない。それは否定文の場合、また時制とのからみ合いとにおいてである。

「電話スル」という動詞だけをみると、非継続的動詞と考えられるので、マデニとは共起するが、マデとは共起できないはずである。

24. ① 6時マデ電話ヲシテネ。(×)

② 6時マデニ電話ヲシテネ。

予想した通りの結果になったが、今度はこの例文を否定文にしてみよう。

24. ① 6時マデ電話ヲシナイデネ。

② 6時マデニ電話ヲシナイデネ。(×)

肯定文では言えた文が否定文にするとさえず、肯定文では言えなかった文が逆に否定文にするとさえるといふ結果が生じてくる。

25. ① 15日マデ戻ル。(×)

② 15日マデニ戻ル。

③ 15日マデ戻ラナイ。

④ 15日マデニ戻ラナイ。(×?)

例25-①の肯定文では文法的に正しくないはずの文が、否定文にすると例25-③のように正しくなるという逆の結果になった。それでは、「マデ＋継続的動詞」は肯定文では問題がないが、否定文ではどうか、「マデニ＋非継続的動詞」が否定文になると言えないのか考えてみよう。

26. ① 8時マデ会イタイ。(×)

② 8時マデニ会イタイ。

③ 8時マデ会イタクナイ。

④ 8時マデニ会イタクナイ。(×)

27. ①母ハ80オマデ死ヌダロウ。(×)
②母ハ80オマデニ死ヌダロウ。
③母ハ80オマデ死ナナイダロウ。
④母ハ80オマデニ死ナナイダロウ。(×)

「マデニ＋非継続的動詞」の場合、肯定文では可能だったはずなのに、否定文では言えないという結果になる。それでは、「マデ＋継続的動詞」の場合はどうなのであろう。

28. ①6時マデ待ツ。
②6時マデニ待ツ。(×)
③6時マデ待タナイ。
④6時マデニ待タナイ。(×)

29. ①町マデ歩ク。
②町マデニ歩ク。(×)
③町マデ歩カナイ。
④町マデニ歩カナイ。(×)

30. ①75オマデ働ク。
②75オマデニ働ク。(×)
③75オマデ働カナイ。
④75オマデニ働カナイ。(×)

「マデ＋継続的動詞」の場合、否定文にしても通用し、文法的、非文法的といった面はそのまま受け継がれてる。

ところが問題がないわけではない。以下の用例を眺めてみよう。

31. ①コノ仕事ハ1時マデ終ワル。(×)
②コノ仕事ハ1時マデニ終ワル。
③コノ仕事ハ1時マデ終ワラナイ。
④コノ仕事ハ1時マデニ終ワラナイ。

「マデニ＋非継続的動詞」の例の場合、否定文にすると言えない（また

は、言いにくい) という予想が立てられたが、ここでは例31-④のように言うことができる。例31-③では「この仕事は1時前には終わらないが、1時には終わる」といった意味になる。つまり、「1時までかかる」ことになる。例31-④にあっては、「仕事は1時を過ぎる」といったニュアンスを含んでいる。

31. ① 3時マデ着ク。(×)

② 3時マデニ着ク。

③ 3時マデ着カナイ。

④ 3時マデニ着カナイ。

「着ク」という動詞は非継続的動詞と考えられるので、「マデニ」と共起する素性を持つていることは先述の通りである。したがって、例32-④のような否定文では言えないのではないかと考えられたが、ここでは可能で、例31の場合と同様である。「外出スル」はどうなるか考えて欲しい。それでは中性的動詞である「眠(寝)ル」はどうなるであろうか。

33 ① 8時マデ寝ル。

② 8時マデニ寝ル。

③ 8時マデ寝ナイ。

④ 8時マデニ寝ナイ。(?)

例文22で肯定文については考察したが、否定文の場合であっても問題はなさそうである。

「マデ」「マデニ」と動詞との共起の問題は、その構文が否定文になった場合、かなりあいまいさを持つことが理解できるが、さらに検討を加える必要はある。また、その構文に特定の語句が加わるとどう変化するかなど興味ある点も残されている。ただ、言葉はもともと肯定文から出発したものであるだけに、あまり否定文にのみとらわれ過ぎると好結果が得られない場合もある。日本語の「マデ」と「マデニ」に頁をとり過ぎてしまったが、今度はフランス語ではどうなのか、jusqu'(à) と avant を調べてみ

ることにする。

34. ① Nous arriverons avant 3 heures.
② Nous arriverons jusqu'à 3 heures. (×)
35. ① Elle est partie avant 12 heures.
② Elle est partie jusqu'à 12 heures. (×)
36. ① Je finirai mon travail avant midi.
② Je finirai mon travail jusqu'à midi. (×)
37. ① Il rentrera avant 5 heures.
② Il rentrera jusqu'à 5 heures. (×)

例34～37にあっては、どの例文も *avant* は言えるが、*jusqu'à* を使うことはできない。これまで考察した日本語の例から、フランス語も動詞との関連が密であると理解できよう。つまり、上の例での動詞（ここでは、*arriver*, *partir*, *finir*, *rentrer*）は非継続的素性を持っているので *avant* とは共起するが、*jusqu' (à)* とは共起しないのである。それでは継続的動詞の場合はどうなのであろうか。

38. ① Mon père a travaillé jusqu'à 80 ans.
② Mon père a travaillé avant 80 ans. (×)
39. ① Restez ici jusqu'à 9 heures.
② Restez ici avant 9 heures. (×)
40. ① J'attendrai jusqu'à votre coup de téléphone.
② J'attendrai avant votre coup de téléphone. (×)

例38～40における継続的動詞（ここでは、*travailler*, *rester*, *attendre*）は *jusqu'à* とは共起するが、*avant* とは共起しない。この点だけを考えてみると、フランス語も日本語と同様に継続を表わす動詞は「マデ (*jusqu'à*)」と、非継続を表わす動詞は「マデニ (*avant*)」と共起すると結論づけられる。ただ、フランス語にあっても、日本語と同様に否定文になると問題はでてこないのかという点を考えてみよう。

41. ① 6 時マデ電話シテ下サイ。(×)

② 6 時マデニ電話シテ下サイ。

③ 6 時マデ電話シナイデ下サイ。

④ 6 時マデニ電話シナイデ下サイ。(×)

41'. ① Téléphonez-moi jusqu'à 6 heures. (×)

② Téléphonez-moi avant 6 heures.

③ Ne me téléphonez pas jusqu'à 6 heures. (? ×)

④ Ne me téléphonez pas avant 6 heures.

日本語に関しては既に考察したので、フランス語の例を眺めることにする。téléphoner は非継続を表わしている動詞であるから、例41-①の言い方はできない。したがって、この文をたとえ否定文にしても言えないはずである。この点をフランス人に質問してみると、誰れもが例41-①については即座にダメだという。これは当然なのだが、ところが例41-③の場合だと返答はすぐには返えってこなく、しばらく考えた後でダメだという。このような否定文になると、日本語でもそうだがフランス語の場合も頭の中を整理しなければならないようである。例41を見ると、肯定文、否定文共に téléphoner + avant の型しか存在しないように考えられるが、jusqu'à を使ってなんとか表わそうとするのであれば、pouvoir を用いれば可能である。

42. Vous pouvez me téléphoner jusqu'à 6 heures.

実際、jusqu'(à) と avant の使い方は難しい面もあって、既刊の参考書でも誤りをおかしている。誤謬をおかしているひとつの例を掲げておこう。例43がそれである。(『現代フランス文法』マンション, S45年)

43. 七時半までに必ず登校すべし。

Il faut venir à l'école jusqu'à sept heures et demie. (×)

動詞 venir は transfer feature という現象によって、継続・非継続の素性が与えられる可能性があるが、例43のフランス文での jusqu'à は誤り

で、avant としなければならない。一般に、venir は日本語の「行く」とは違って継続性はないと考えた方がよい。ただ、この venir に継続性を持たせるためには、何らかの特定の語句を加えるとその可能性がでてくる。この場合、特定の語句から venir への transfer feature と考えられよう。それでは、例43に別の特定の語句を加えたならば、jusqu'à の使用は可能であろうか。

44. Il faut venir à l'école tous les jours jusqu'à 7 heures et demie. (?)

文法的には可能なようだが、少なくとも例43の日本語の訳にはならない。venir は継続性がないと書いたが、次の例を眺めて戴こう。

45. 8時マデニ会イニ来テクダサイ。

- ① Venez me voir avant 8 heures.
- ② Venez me voir jusqu'à 8 heures. (×)

46. 昨日マデ来ナカタネ。

- ① Tu n'est pas venu jusqu'à hier. (?)
- ② Tu n'est pas venu avant hier. (×)

例45は非継続であるから、①が正解なのはすぐに解かる。しかし、例46の場合は日本語を読むと継続性を表わしているので、例46-①の解答が正解になりそうだがどうだろうか。文法的には問題がなくとも、このような言い方はフランス語で言うのは稀れである。つまり、「私は昨日まで君に会わなかった」という書き方をするのが普通で、venir に継続的な素性を与えるのにはめんどろな点が多いのである。

日本語の例でも取りあげたが、日本人学習者がよく間違えるものに「眠(寝)ル」がある。フランス語の「眠ル」は dormir, s'endormir であり「寝ル」は se coucher である。この他にも rester au lit といった表現もできる。問題は日本語の「眠ル」と「寝ル」が厳密に区別されてなく、混同されているがためにフランス語を書いたり訳したりする場合に問題が

でてくる。

47. ①明日ハ早イノダカラ, 早ク寝ナサイ。

②明日ハ早イノダカラ, 早ク眠リナサイ。

この例は日常よく会話で使われる。したがって, *dormir* と *se coucher* を用いた解答が寄せられる。問題はこれらの動詞に「マデ」と「マデニ」が加わった場合に起こる誤りである。結論的に言えば, *dormir* は *jusqu' (à)* と *s'endormir* は *avant*, *se coucher* は *avant*, *rester au lit* は *jusqu' (à)* と共起する。したがって, *dormir* は継続的な動詞, *s'endormir* は非継続的な動詞と考えられるわけで, 日本語訳に際しては大いに留意しなければならない。

48. Elle a dormi jusqu'à 9 heures.

Je dormirai jusqu'à 9 heures.

49. Je m'endormirai avant 9 heures.

Elle s'est endormie avant 9 heures.

50. Elle m'a dit qu'elle s'était couchée la veille avant 9 heures.

51. Elle est restée au lit jusqu'à 9 heures.

上の例文を見ただけで, それぞれの動詞の継続・非継続の区別はできるはずである。このような面は図によって構造を示すと説明しやすい点もあるが, 深層構造を示してみても初歩者が理解するには無理があるだろう。したがって, 結論的に言えば, その動詞が継続的な動詞であるのか, 非継続的な動詞であるのかを見極め, 継続的な動詞であれば *jusqu' (à)* を, 非継続的な動詞であれば *avant* と共起すると考えるのが初歩者には先決である。次に, いくつかの参考例を示したので, これまでの記述を考慮し, 実際にフランス語にうまく訳せるかを確認してもらおう。

52. 東京駅ニ10時マデニ着クヨウニシテクダサイ。

53. 彼女ハ3時マデ留守ダッタ。

54. 6時マデココヲ動イタライケナイヨ。

55. 彼女ハ3時前ニ外出シタ。

56. 夕食マデニコノ手紙ヲ全部タイプシテシマッテマスヨ。

57. コノ切符ハ1月25日マデ有効ダ。

書き方としてはいろいろとあるが、標準的なフランス語を下記に示してみる。

52'. Veuillez arriver avant 10 heures à la gare de Tokyo.

53'. Elle était absente jusqu'à 3 heures.

54'. Ne bouge pas ici jusqu'à 6 heures.

55'. Elle est sortie avant 3 heures.

56'. J'aurai tapé toutes les lettres avant le dîner.

57'. Ce billet est valable jusqu'au 25 janvier.

上の例が全て正解になったからといって安心しないで欲しい。大きな誤りをおかすのは、フランス語から日本語に訳した際にも生じてくるからである。これは、特にavant（マデニ）に関して現われる。日本語のマデニはかなりあいまいな性格を持つ語であることは既に眺めてきた通りである。したがって、avantを含むフランス文を日本文に訳す場合には十分に注意しなければならない。

58. Venez avant dix heures.

10時マデニイラシテクダサイ。

日本語の「時間+マデニ」はあいまいな性格を有しているが、フランス語であってもこの点に関しては同様である。ただし、厳密に言えば、例58のフランス語にあっては10時は含まれてなく、「10時前にきてください」（10時はだめです）と解釈すべきである。

59. Venez avant samedi.

例59を黒板に書いて、日本語訳をさせてみたところ、全員が「土曜日マデニキテクダサイ」と訳した。この訳は正しいかどうか、それは日本語の取り方にもよるが、「曜日+マデニ」はその曜日が含まれるのが通例であ

る。とすれば、この日本語訳は誤訳である。こういった誤訳の生じる理由には、日本人の「マデニ」の考え方の相違もあるが、辞典の責任もある。例59にあっては、土曜日は絶対に含まれない。つまり、「土曜日前ニイラシテクダサイ」という意味であり、「土曜日は忙しくてだめです」とか「土曜日は留守です」という意味が言外に含まれている。仮に、「マデニ」という語を用いて日本語訳を試みようというのであれば、「金曜日マデニイラシテクダサイ」と訳さなければ正しくない。ただし、異論をはさむ余地がないではない。

60. Venez tous les jours jusqu'à samedi.

土曜日マデ毎日イラシテクダサイ。(?)

もし、この言葉を歯医者と言ったと想定してみよう。「jusqu'à+曜日」はその曜日が含まれると考えるべきであることはみてきた。ところが、歯医者は土曜日に休業しているのは誰れでも知っている事実であるので、状況によっては「金曜日マデ」と訳さなければならないことも生じてくる。しかし、初級の段階にあってはこれまで気を使うこともないであろう。ただ、何度も言う通り学校文法に従った場合、次のような例文に対しては厳密に下記の通りに注意しないわけにはいかない。

61. Il est permis aux étudiants de sortir à condition de rentrer au pensionnat avant 10 heures.

10時マデニ寮ニ戻ッテクルノデアレバ学生ノ外出ハ認メル。

この例も、例58と同様に時刻が問題になるが、厳しく考えた場合、仮に学生が10時に寮に戻ってきてみると、門は閉ざされている可能性はある。つまり、「10時前」でなければいけないのである。

62. Il faut mettre vos papiers avant ler septembre.

①レポートハ9月1日マデニ提出ノコト。(×)

②レポートノ提出締切ハ9月1日デアル。(×)

このフランス文に対して、ふたつの解答が提示された。訳の意味として

日本人学習者が誤り易いフランス語の問題点

は、どちらも同一と考えられるが、9月1日という日付の訳に問題がある。つまり、フランス文は「9月1日前ニ提出シナケレバナラナイ」の意味であり、9月1日に提出したのでは遅いのである。したがって、「マデニ」を含めた日本語訳では「8月31日マデニ提出シナケレバナラナイ」としなければならない。決して、「9月1日」というフランス文にまどわされてはいけないのである。ここで、例文7-②の日本語訳が「今日ノウチニ1万円用立テナケレバナラナイ」との訳が正しいことが解かるであろう。「avant demain」は「明日マデニ」ではなく、「明日前ニ（今日ノウチニ）」と訳さなければならない点が難解だといえよう。

63. Je dois terminer ce travail avant demain.

明日マデニコノ仕事ヲ終エナケレバナラナイ。(×)

この日本語訳が正しくないことは理解できるはずである。このような時を示すものでなければ誤りは少ないので、文中に「avant+時」が含まれている場合だけ、すぐに「マデニ」とは訳さず、一度「前ニ」と訳してから日本語の文章を考えてみたら、誤りは相当に減少するはずである。最後に、否定文の例での注意をしておこう。

64. Si elle n'arrive pas avant 5 heures, nous partirons sans elle.

5時前ニ彼女ガ着カナイナラ、彼女ヲオイテ出カケヨウ。

この日本語訳を「5時になっても彼女が……」とすれば問題がでてくる。なぜなら、フランス文では5時が含まれないからである。「5時になっても……」とのフランス語訳は、次のような文の方が理想的である。

65. Si elle n'est pas arrivée à 5 heures, nous partirons sans elle.

しかし、次の構文はどうであろうか。

66. J'ai complètement oublié de lui dire que je ne reviendrai pas avant 6 heures.

6時前ニハ歸エラナイト、彼女ニ言ウノヲスッカリ忘レタ。

この例では、「6時にならないと……」と訳すことは可能であり、「6

時までは戻らない」とも訳せる。このフランス文で *avant* の代りに *à* を用いたとすれば、「6時きっちりにならないと……」の意味になる。しかし、こういった言葉を使うことは稀れであると言えよう。フランス語にあっても細かな点については、問題が多くあり単純に解決できない点も少なくないのである。

67. *Votre robe ne sera pas prête avant samedi.*

貴女ノドレスハ土曜マデニデキマセン。

この日本語訳はかなりあいまいで、土曜日にはでき上っているのか、日曜日にならないとだめなのか明確でない。ただ、フランス文にあっては、土曜日にはでき上っているのである。したがって、「貴女のドレスは土曜日にならないとでき上がりません」と訳した方が適訳であろう。

68. *Je ne compte pas rentrer avant le 10 janvier.*

1月10日マデニ戻ルツモリハナイ。(?)

この例文も例67と同様に疑問のある日本語訳である。この訳も「1月10日にならないと……」と訳した方がよさそうな気がするが、これだけの文脈では不十分である。なぜなら、「1月11日にならないと戻らない」と訳せもするからである。

69. *Je ne suis pas libre avant dimanche.*

日曜日ニナラナイト暇ニナラナイ。

70. *Je ne suis pas libre jusqu'à dimanche.*

日曜日マデハ暇デナイ。

このふたつの例を見て、その差が理解できるであろう。簡単な文章であるからと安易に考えてはいけないということを、「マデ」(*jusqu' (à)*)と「マデニ」(*avant*)は教えてくれているのである。